

産別民同がめざしたもの(3・完)

三戸信人氏に聞く



- 1 労働運動への参加
- 2 戦時下の左翼前歴者（以上第489号）
- 3 日本労働運動の再出発
- 4 産別会議の自己批判（以上第490号）
- 5 産別民同の結成
- 6 新産別への展開（以上本号）

5 産別民同の結成

臨時全国大会の位置

三戸 産別民同の結成は、昭和22年7月における産別会議の臨時全国大会に端を発していると思います。私らはこの大会を自己批判大会と呼んでいます。この自己批判大会までが第一幕だったと思います。自己批判大会をへて再生するはずの産別会議がこれを撤回した結果、事態は新しい局面に入ります。

すなわち、象徴的なエピソードとして注目されているのが、自己批判大会に来賓として出席した徳田球一の挨拶でした。彼は、自己批判を「坊主ザンゲ」と攻撃したわけ。これ以降、昭和22年11月17日からの第2回定期大会をへて、翌23年2月13日の産別民同の旗揚げまでが第二幕となります。この間は、産別会議の書記局と共産党本部の、はっきりなしの対立抗争がつづきます。

前回は述べましたが、臨時全国大会は、産別

会議の歴史において決定的な意味をもっていたと思います。自己批判を撤回したことで、産別会議は、自らの労働組合の自主・独立や産業民主主義を確立する機会を逃しました。もし産別会議がきちんと自己批判を行い、再出発していたならば、産別民同の結成もなかったと思います。あるいは産別会議と総同盟が合同し、それこそ高野（実）さんが描く巨象のような“統一労働同盟”が誕生していたかもしれない。

臨時全国大会ではもう一つ、当面の運動方針として生産復興闘争と並んで地域闘争の方針を明らかにしています。前者については、何ら問題はないのです。私自身、これを支持しました。問題は後者の地域闘争です。この地域闘争は、労働組合における中央統一闘争が2・1ストで禁止された結果、これを打開するため考え出した新しい戦術で、同じ22年11月17日からの第2回定期大会で正式に採択されました。

ところがこの地域闘争は、日本共産党の指導により、地域権力の奪取や職場放棄という労働運動とは無縁の地域人民闘争として展開された

のです。これは、労働組合の存在を否定するような、いわば極左的な運動でした。産別会議は、自己批判を撤回する一方で、この地域人民闘争の戦術を採用したのです。私は産別会議の崩壊は臨時全国大会、すなわち自己批判大会の時点から始まった、と見ています。

事務局と日本共産党との対立

三戸 産別民同の結成へ向けた第二幕は、産別会議の運動方針やあり方をめぐっての非黨員幹事、執行委員、そして私らの書記連中と日本共産党との対立、という形で表にあらわれました。

その前に、執行部体制が強化されました。議長が新聞単一の聴濤克巳さんから全日本機器労組の菅道(かん・まこと)さんに、事務局長も佐藤泰三(電産)さんから吉田資治さんに代わりました。議長も事務局長も機器から選ばれたのです。機器は産別会議の背骨の存在で、全通と並んで組合員が多く、フラクションにおいても最強でした。

他方で、細谷松太さんは事務局次長の肩書ははずされ、平の書記となりました。

私はいまもって理由がわからないのです。細谷さんに対する徳球(徳田球一)の対応は憎しみに近い嫌い方でした。徳球は、細谷さんについてヒラの書記でも産別会議に置いておくのはまずい、手元に置けば安全だろう、と思ったに違いない。伊藤憲一君が徳球の代理となって、何回か細谷さんに「共産党本部に移って労対の責任者になってくれ」と勧めていました。野坂(参三)さんも直接、代々木の本部に戻るよう説得していたのです。本人は代々木へ行く気など微塵もない。

もう一つ、臨時全国大会以降、幹事の各専門部の責任担当制が決まりました。書記に対してにらみを利かし、事務局の独走を許さないとい

う体制をつくったのです。考えて見ればこれが本来のあり方ですが、幹事が、文書の作成や企画・立案をリードするようになりました。それまでは運動方針の作成を含め、産別会議における文書の起案はすべて書記に任されており、内容面でも事実上フリーパスでした。幹事といっても全員が労働運動については素人で、私らに頼らざるを得ないという事情もあったと思います。

実際、あの頃は“民主革命”の時代です。岡倉古志郎さんや、いわゆる一高・東大の中でも秀才と聞いていますが、井出洋さんはじめ優秀な書記がたくさんおりました。彼らは語学力があり、政府や占領軍との交渉でも書記の協力がなければ進展しない、という問題も現実がありました。

事務局側と日本共産党の対立といいますが、具体的にはどのような問題が存在したのですか。

三戸 “事務局対共産党”というより、当初は“産別会議対共産党”といった方が正しいだろう。対立点は二つありました。一つは、臨時全国大会で導入したところの地域人民闘争に対する評価であり、もう一つは総同盟から提案があった労働戦線の統一に対する産別会議の側の対応です。

臨時全国大会が終わってすぐ、正式の第2回定期大会へ向けて準備が始まりました。第2回定期大会は昭和22年11月です。そして運動方針の原案起草者として斎藤一郎、私、大谷徹太郎、井出(洋)の4人が決まり、何回かの検討を経て原案が起草され、幹事会もこれを了承しました。地域人民闘争に対する方針については斎藤君が、戦線統一論については私が執筆しました。

前者の地域人民闘争ですが、産別会議としての見解は、その必然性を認めるが問題も多いと

いうことで反対を決めました。地域人民闘争を展開した場合、中央の統制が利かないバラバラの運動になってしまう危険性がありました。また争議権をはじめ、何もかも地域組織に渡すことになれば、結果として労働組合の独立性を自ら否定し、全国的な統一・団結を困難にしてしまう懸念がありました。

後者の戦線統一論では大筋、私の考え方が原案として認められました。総同盟は臨時全国大会の前日、島上善五郎さんなどが産別の本部にやって来て、戦線統一の申し入れを行いました。突然の申し入れです。前月に社会党首班の片山哲内閣が誕生し、片山内閣の基盤を固めようという配慮があったからかもしれない。

先方は、戦線統一の申し入れの際に、フラクションは二重権力になるから認められないとか、スト激発主義は排すべきだとか、いろいろ条件を付けてきました。これは当然な要求です。

他方、産別会議の見解は、確かに総同盟との統一なしに日本労働戦線の統一は不可能なんですけれども、その前に総同盟と地道に共同闘争を重ねるとか、地方レベルでも下から統一運動の機運を起こすとか、あるいは世界労連への参加について両者が協議するとか、事前に取り組むべき課題がたくさんあり、これを優先させたいというのが私らの考えであり、幹事会もこれを承認しました。

これに対して共産党の方は、産別会議と総同盟の下からの共闘の積み重ねのうえに戦線統一をはかって行くということではなく、初めから全労連に統一しようという考え方だったので。全労連には産別会議、総同盟、中立組合もたくさん加盟しています。だから全労連に網を掛けて取り込み、その見込みが立つのであれば産別会議を解散してよい、という考えだったので。

ひとつの考え方ではありますね。

三戸 いや、こういうのは邪道ですよ。真の統一を確保するためには下からの共闘が不可欠であり、それを前提にしていると思う。これが筋ですよ。上から“投網”を掛けて統一するなんて……。

共産党は、自分がコントロールできるのであれば何だってよいのです。結局そうなりましたけれども、産別会議を解散するという共産党における“清算主義”はこの時点で芽生えた、と私はみているのです。

共産党の要求

さて、第2回目の定期大会が近づくと、共産党が、産別会議の運動方針のうち地域人民闘争と戦線統一に対する見解は問題があり、これを支持・強化する方向で書き直す必要がある、と要求してきました。伊藤律が、私らを本部に呼び付けて「徳球さんが怒っているぞ」(笑)と脅したり、実際に徳球も1回だけ会合にやって来て、私らを怒鳴り散らしました。

白川晴一や服部麦生も、私や斎藤一郎君ら書記を党本部に呼びつけて、運動方針案を書き換えるよう婉曲に“指導”したわけです。その時であったと思いますが、私と斎藤君らが徳球に食い下がって産別大会における挨拶を難詰しました。

共産党の要求を拒否されたのですね。

三戸 当然です。喧嘩はまとまっていれば強い。総勢で50名くらいですが、書記は完全に一つにまとまっていました。私らは「代々木の野郎は何だ。労働運動についてわかっていないじゃないか」と意気軒昂でした。だって、新運動方針の原案は執行委員会の決議によって準備され、幹事会が機関決定したんですもの。共産党は、その幹事会が承認した原案を「これは認められない。書き直せ」と要求したのです。これ

こそ共産党の組合支配であり、労働組合の独立性と自主性を踏みにじるものですよ。

共産党は執拗でした。第2回定期大会の2、3日前だったと思います。新事務局長となった吉田資治さんが書記と幹事の全員を緊急に招集し、席上「この新運動方針には重大な欠陥があるので再検討したい」と突然、言い出したのです。私らは「これは幹事会で決めたものじゃないか」と主張しました。しかし吉田さんは「この運動方針には問題があり、事務局長の責任において推敲する」と述べ、全面改訂を宣言したのです。これは、代々木が吉田さんに原案の撤回を指示したのだと思います。

運動方針の全面書き換え

三戸 第2回定期大会において正式提案された運動方針は、井出(洋)君らが執筆したとされています。けれども共産党が事前に下書きし、これに吉田資治さんや井出君が多少加筆・補正したものではないか、と私は見ています。この共産党が用意した運動方針の執筆に、斎藤(一郎)君は関係していないと思います。

改訂された運動方針案では、共産党が提唱した地域人民闘争について、全国的な産業別闘争の準備闘争と位置づけていました。地域人民闘争は職場の封建性を打破し、地方権力との闘争を通じて日本民主化の基礎が築かれるとか、生産復興のたたかいも地域人民闘争で行う、とうたっていました。

労働戦線の統一についても、産別会議の強化というよりは、むしろ全労連に対する育成強化をうたい、つぎに総同盟との無条件合同の方向を提示し、戦線統一を望むならば“産別会議の枠を外すべきだ”と提案していたと思います。何もかも、共産党の意向に添う形でまとめてありました。

私は、代々木の本質を見た感じです。大会2

週間前、幹事会が決定した運動方針の原案が単産に流され、各単産の支部ではその原案により討議を重ねていました。ところが機関が決定したその運動方針案が丸ごと撤回され、大会の当日に共産党が作成したと思われる運動方針案に差し替えられたのです。このことの正当性なんて、共産党系の学者がどんな理由付けを行おうとしてもできないはずです。この事実は、産別会議が、共産党に対し従属した関係にあり、独立していないことを示しています。

第2回定期大会については、私には悔しい思い出として現在も鮮明に残っております。共産党は大会の前日に党籍をもつ代議員に招集をかけ、大会期間中、党が借り受けた日鉄の寮に缶詰にして意思統一を行いました。

またその夜に、先の7月における臨時大会のときと同様に“水曜会”を開きました。私は出席していませんが、書記では斎藤一郎が出席していて、終了後に報告を受け、無力感に襲われました。すべてが、共産党が望む方向でまとめられていました。

だから第2回大会では一般情勢報告にしる、当面の闘争方針にしる、共産党の主導で作成された諸方針や決議がスースーと採択されたのです。私ら書記には発言権がなく、ただこれを眺めているだけだった。惨敗ですよ。

異論は出なかったのですか。

三戸 異論はあっても、執行部では事務局長の吉田資治さん自身、事前に「すべて俺が責任を持つ」と明言していました。もう黙っているほかなかったのです。共産党系の代議員は、前日のうちに足並みをそろえていました。大阪の西川彦義君が機器の代議員として反対の質問を行う予定でしたが、彼も沈黙してしまったのです。

労働組合の新動向

三戸 ここで、この時期における労働組合の新しい動きを紹介しておきます。

昭和22年10月10日、まず、炭鉱労働者の結集体であった炭全協（炭鉱労働組合全国協議会）が組織運営や産業復興のあり方をめぐって分裂しました。そして、中立系の炭連や総同盟系の日鉱を母体に新しく炭労が結成されたのです。炭鉱労働戦線における民主化運動の始まりといっていよいと思います。

また1週間後の10月16日、国鉄の臨時大会が給与問題や地域闘争の是非をめぐって紛糾し、流会となりました。そして右派の斎藤鉄郎、加藤閔男らを中心に、翌11月7日に国鉄反共連盟が結成されます。この国鉄反共連盟が23年3月、国鉄労組民主化同盟（国鉄民同）となりました。この時点では、たんに共産党系の執行部に対する感情的な反共でしたけれども、国鉄における民主化運動を促す発端となりました。余談ですが、岩井（章）君は、この国鉄民同から出てくるのです。

さらに10月25日、新聞単一が臨時大会を開き、産別会議からの脱退の議案は否決されましたけれども、産別会議における非民主的な指導や共産党のフラクション活動に対してこれを否定し、あるいは猛省を促しておりました。しかし、ご存じの通り新聞単一は1年も経たないうちに産別会議を脱退し、昭和23年7月に朝日と読売の組合を中心に全新聞（全日本新聞労組）を結成したのです。

このような労働組合における新しい動きのなかで、総同盟は昭和23年1月13日に第2回中央委員会を開催して、国鉄や全通、新聞単一、日通、電産など産別会議の各単産における民主化運動を支援・協力することを宣言した“労働組合民主化運動に関する件”を採択したのです。

産別民同が旗揚げする条件が整ったのですね。

三戸 まあ、そうです。

三風寮における会議

三戸 昭和22年11月の第2回定期大会が終わって以降、産別会議の事務局は重苦しい雰囲気になりました。

事務局は大所帯で、書記だけで50人、アルバイト的な人を含めると60人ぐらいいたかもしれない。全員が共産党員です。その書記の中に、果たしてこのまま共産党員でいることが良いのかと自問する人が出て、例えば秋山武君などは「俺はもう我慢できない」と怒って離党してしまったのです。

産別会議の場合、離党は即解雇となります。彼には子供が5人いて、生活も根底から崩れることにはなりますが、決断したのです。秋山君はその昔、松本高校に在学中に共青の活動で放校となった経歴があり、大変筆が立つ人でした。彼はのちに独学で弁理士の資格をとり、その業界の指導者となっています。

秋山武君の離党などもあって、共産党本部と事務局との関係は険悪となり、もう正式のパイプは切れてしまいました。徳球の“情報係”で、裏で代々木に直結していた斎藤（一郎）君だって「もうどうしようもない」と愚痴っていたのです。

共産党の方も困って、12月（1947年）に入っただったと記憶するが、先方から事務局細胞と話し合いたいのだが、という打診がありました。私らは最初、これを婉曲に断ったのです。

野坂参三から直接、産別会議における一連の問題について政治局として話し合いたいという申し入れがあったのはその直後のことです。そして豪徳寺（世田谷区）の“三風寮”において両者の話し合いがもたれました。“三風寮”というのは、党本部に勤務する書記連中などの宿

泊施設なんです。

第1回目の話し合いは欠席者が多く、事実上流れました。第2回目の会合で両者は、両者というよりものちに産別民同の旗揚げをする私らのグループと先方との間の溝があまりにも深いことが改めて確認されたのです。

細谷(松太)さんが脱党届を出したのは12月17日のことです。2回目の話し合いが昭和22年12月のいつだったか、さっきから思い出せませんが、細谷さんの離党の2、3日前だったことは間違いない。そして、私が事務局細胞のキャップを解任されたのもほぼ同時です。

日本共産党とはどんな問題について話し合ったのですか。

三戸 党と労働組合の関係はどうあるべきか、という問題についてだったと思います。あの時期の言葉でいえば、レーニン主義の労働組合論についてです。私らは、世界労連結成の背景やその組織論で意見を述べました。野坂さんたち政治局の人は、レーニンの労働組合論をベースにしていたと思います。共産党の方は長谷川浩だったと記憶するが、私らのことを“マルトフ”と言うのです。

マルトフ？

三戸 ええ、“マルトフ”です。“マルトフ”とはメンシェビキの人でその路線を意味しています。長谷川(浩)は、レーニンの労働組合論でないと駄目だ、と率先していうのです。彼らは、主として徳球の代弁をしたり、野坂さんにくっ付いたり、自分の意見を直接には出さない。レーニンがいう労働組合論が当時、共産党における最大公約的な考え方でした。一番無難な意見ですよ。

2回目の話し合いでは、両者からそれぞれの意見表明があって、最後に野坂参三に見解を求める形となりました。野坂さんは、党と労働組合の関係について“労働組合は共産主義の学校

である”と断定するわけです。

野坂さん自身、ほんとうにそういう考えの持ち主ではないのです。彼はその場の空気に押されたのだと思います。出席者は野坂、長谷川、伊藤憲一、白川晴一、それに名前を忘れたけれども統制委員長かなんかの肩書の人もありました。伊藤律は2回目は出席していない。

結局、意見集約ができず、政党と労働組合とに関する論争は打ち切りとなりました。次に問題となったのが細谷(松太)さんの身分についてです。このことについて、野坂さんから細谷さんが産別会議の書記を辞めること、その代わりに共産党の本部勤務員としてもらい受けたい、これは政治局の決定だ、という報告がありました。

先ほども述べましたけれども、細谷さんに対してはそれ以前から、党の労働組合部に来てほしいとの勧奨がありました。これは、細谷さんを“飼い殺し”にすることを意味していました。そして野坂さんが突然、細谷さんが書記を辞めることについて、要するに彼のクビを切ることについて、賛成か反対かの意思表示を求めたのです。

個々にですか。

三戸 そうですよ。細谷さんを除いて、一人一人に賛成か反対かの意思表示を求めたのです。細谷さんが産別会議の書記を辞める辞めないは、共産党の政治局が決める問題ではないのです。これは細谷さん個人の問題ですよ。

名前を忘れたけれども美濃部という兄弟や、井出(洋)君もその他大半が代々木の意向に添い、即時に政治局の決定に賛成しました。私の隣は斎藤一郎君で、彼はオールド・ボルシェビキです。彼は独り言のように「政治局の決定なら従わざるを得ないじゃないか…」と、非常に不満だということを身振りに表して意思表示をしたのです。次は私の番で、私が初めて態度保

留を表明し、これに大谷徹太郎君らがつづきました。

結局、賛成多数で細谷さんの産別会議辞任が決まりました。産別会議の事務局は自己批判問題以来、まとまりがありました。この“三風寮”における共産党政治局との会合をきっかけに分裂してしまっただけです。

旗揚げの準備

“三風寮”における会合以降、産別民同の結成までの経過については細谷松太、三戸信人、大谷徹太郎3氏の座談会（前掲「産別民主化同盟結成まで」）や、『新産別の二十年』（1969年）の本文で多少紹介してあります。産別民同の運動はそもそも、細谷さんや三戸さんなど産別会議本部の書記連中が中心だったのです。

三戸 初めはそうですよ。大谷君を含めてね。このほか、書記連中では先に離党した秋山武君や萩沢君などもいて、協力や支援などがありました。この過程で忘れられない人が、部外にも一人いました。後で述べますが、藤井哲夫さんです。

要するに、産別民同は日本労働運動を本来のあり方に戻したいという書記連中と単産本部役員の有志で結成されたもので、特定の人物の努力だけでできたものではない。

細谷さんは当初、産別会議に関係する運動はもう一切やらないという態度でした。ただ彼はこれを機会に自宅に1年ぐらいいもって日本労働運動の通史を書き、その後は産別会議傘下の港湾などの組合に顧問か嘱託として勤め、生活を立てたいという考えでした。港湾には田井増五郎さんや柏原実君など、戦前派の連中がおりました。

一方、私自身は“一矢報いてやれ”という気持ちでした。正直のところ“負け犬”のような

形になっていて、悔しかったのは事実です。だって自己批判大会にしる、第2回定期大会にしる、私らが起草しかつ機関も承認した運動方針案がことごとく代々木によって否定されたのです。私らの考えや主張が間違っていたとは思えない。

私自身、事務局細胞のキャップを解任されたが、産別会議の書記を辞めなかった。僭越かもしれないが、私は産別会議の運動を立て直したいという気持ちが募っていて、いったん辞めてしまうと代々木のやり方に不満を持つ単産役員との接触到困難を来すことが予想されたのです。

私は昼間は動かず、書記の仕事に専念していて、夜になると大谷君や秋山君らと連繋・合流して、非党員の幹事や執行委員、あるいは各単産を回って有志の方々に産別会議の民主化について訴えたわけです。

産別会議の2代目の議長の菅（道）さんは、民主化運動の展開に初めは賛成だったのです。菅さん自身、代々木に体よく利用されていた面があったと思います。最初から積極的に支持・協力してくれたのは、副議長の光村甚助（全通）さんと喜田康二（印刷出版）、金山敏（生保）さんなど非党員の幹事の方々でした。

非党員の執行委員の中では、電工の落合英一君や金属の和田次郎君などが賛成し、側面から協力してくれました。和田さんはのち共産党に入りましたが、非常に憤慨して「共産党のやり方は独裁的で、許せない。俺はあなたたちに何でも協力する」と公言していたのです。

反対に、事務局の中では斎藤（一郎）君が逆に代々木の方に傾いてしまったのです。彼は“三風寮”での話し合いまではむしろ共産党の方針や態度を批判し、産別会議における民主化運動の必要を指摘していたのです。

斎藤君は、時事通信社の記者の山崎早市と並

び、徳球の“情報係”でした。彼は、私が毎夜、民同運動の旗揚げのため動いていることについて知っていました。

山崎は当時、労農記者会の総元締めをしていて、新聞界に隠然たる力をもっていた人物です。たぶん勤が働いたのだらう、山崎は毎日のように産別会議の事務局にやって来て、私らの動きを探っていました。私はとぼけて通しました。齋藤君自身、私らの動きを徳球や山崎早市に情報を流すこともできたのですが、しかし彼は絶対に口外しなかったのです。この点、私は現在でも齋藤君に感謝しているのです。

先ほど名前が出ました藤井哲夫氏とは評議会系の指導者で、のち労働農民党福岡県連の会長を歴任された方ですね。

三戸 そうです。藤井さんは第2次共産党の最初の党员ですよ。彼は大正15年12月に、山形県の五色温泉で開かれた共産党の再建大会に九州地方の代表として参加した経歴があり、秘密党员だったのです。藤井さんは齋藤君と仲良しで、戦後は不二越精機という会社の社長をしながらいろいろな商売にも手を出して、そんな関係で築地（中央区）にあったすし屋の二階を貸してもらい、旗揚げの準備をしたのです。

産別民同の理念

産別民同は結成に際し、「政党からの独立」「政党支持の自由」などを掲げております。僕は当初、“産別民同イコール反共運動”というイメージを抱いておりました。率直に申し上げますと、産別民同の結成は総同盟の高野派や経済団体との連携ですすめられた運動であり、日本共産党やその指導下にある産別会議に打撃を与えるための運動であった、と理解していた時期がありました。

三戸 そうでしたか。産別民同がそういうイメージで見られてきたことは、私も承知してい

ます。齋藤鉄郎が親玉の、国鉄反共連盟を連想するからかもしれない。国鉄反共連盟は、共産党のフラクション活動について猛烈に反発しておりました。また電産の緑会を連想しての場合もあるだろう。電産の緑会は、技術者や職員層を中心にまとまり、反共の色彩だけを色濃く帯びていました。

確かに、国鉄反共連盟にしる、電産の緑会にしる、当初はガリガリの反共主義を掲げ、反日本共産党でありました。それに、産別民同が旗揚げしたのち、共産党が私らに対して『アカハタ』や産別会議の機関紙『労働戦線』を通じて反共分裂主義者のグループとか、反共・売国の運動とかのレッテルを貼って、激しく非難中傷していたことも影響しているかもしれない。

私らが、反共主義を打ち出し、実際に押し進めたことはないのです。産別民同は「政党からの独立」「政党支持の自由」と並び、「組合は権力や資本に対しても独立していなければならない」と主張したのです。

私は前回か前々回に、社会大衆党が昭和7年（1932年）1月に反ファシズム・反共主義・反資本主義のいわゆる“三反綱領”を掲げ、労働組合（日本労働組合会議）もこれを支持して、戦時体制の構築に協力した歴史について少し述べたと思います。“三反綱領”のうち、反ファシズムや反資本主義のスローガンもさることながら、ねらいは反共主義にあったわけですが、私らはこの戦前の歴史に学び、反共主義は絶対に掲げないことを確認し、他方で、資本や権力、政党から独立することの重要性も強調したのです。

要するに、私らの運動は政党、資本、権力から真に独立するための運動であり、組合民主主義の確立をめざす運動だったのです。そういうねらいで、産別会議の組織と運動の建て直しを行おうと志したのです。そして産別民同は発足

に際して、組合員大衆にはっきりとわかる形で、すなわち“組合を組合員の手へ”“つくられた組合から自分たちがつくる組合へ”というスローガンを掲げたのでした。

朝鮮戦争の前、昭和24年に入ってレッド・パーズの嵐が吹き荒れました。産別民同、そのときは新産別になっていましたけれども、私らはこれに毅然と反対しました。労働組合で唯一、新産別がレッド・パーズに反対したのはご存じですよ。

ええ。

三戸 共産党員であれ誰であれ、権力が労働組合に介入し、共産党員を捜しだしてパーズするなんて許されません。労働組合は、この権力の弾圧に対して組合員を守らなければならない。しかし、労働組合の多くはこれ幸いとばかりにむしろ協力し、あるいは傍観しました。このレッド・パーズに「労働組合は組合員を守るべきだ」と毅然と反対したのは、全国団体としては新産別だけだったのです。

重ねて申し上げたい。産別民同系の組合員に反共を叫び、あるいは煽った人がいたかもしれない。しかし原理的な反共ではなかったことは確実なんです。日本共産党に対して、組合の独立性を破壊する政党だとして、これには厳しく反対しました。けれども反共主義を確認し標榜したことは断じてなかったのです。

(昭和23年)2月13日、産別民同を旗揚げする最後の集会でも、出席者から「産別民同はマルクス主義に反対するのか」「共産主義にどのように反対するのか」という質問が出ました。私らは、これらの質問に「共産主義に反対するのではない。マルクス主義はもとよりだ」と答えました。

産別民同は、労働組合において民主主義を確立することに最大の目的がありました。労働組合の民主化とは、具体的にいえば政党からの独

立であり、政党支持の自由であり、あるいは資本・権力からの独立でありました。さらには、これらに思想・信条の自由も加えるべきである、と私らは当時考えたのです。労働組合はこれらの基礎のうえに、組合員の労働条件改善や社会的地位の向上の問題について考えるべきなんです。

ウェブの産業民主制の理念に立ておられたのです。

三戸 そうです。シドニー・ウェブの産業民主制は、たんに労働者の発言権の確保や経営への参加を求めていただけでなく、労働組合内部におけるデモクラシーの確立を重視していたと思うのです。ウェブの産業民主制にはそういう要素も含まれていた、と私は理解したいのです。この点はとくに紹介しておきたいのですが、産別民同を旗揚げする最後の会合では、ウェブの産業民主制の重要さを確認して終わったのです。

民同運動の種本

三戸 このことは、今回初めて話すような気がします。実は、産別民同の運動には種本がありました。

種本？

三戸 ええ、種本です。産別民同の運動は、日本共産党の指導に対抗するものです。当時、経営者も経済団体も半ば恐れ、手が出なかった共産党に対抗するには、誰もが納得する訴えや論理がなければならない。私らは自己批判大会以降、まず世界と日本の労働運動の歴史に学ぼうと考えました。先ほど述べた、戦前における社会大衆党の“三反綱領”や総同盟など当時の労働組合における“三反主義”の問題についても、私らはこのときに批判的に検討を試みたのです。

ところで、日本労働運動が国際的な経験から

学ぶとしたら、やはり人民戦線期におけるフランスの労働運動だと思います。フランスのCGT(労働総同盟)とCGTU(統一労働総同盟)は人民戦線期に合同しました。それまでは両者は激しく対立し、ファシズムに対して有効的にたたかっていたりいなかったのです。

このCGTとCGTUが統一する協議において、両者が、労働組合のあり方として確認したのは「政党からの独立」と「組合員の政党支持の自由」であったのです。私らは“これだ”と思いました。

何という文献ですか。

三戸 ……忘れました。CGTとCGTUが合同した経過を記録した本が、資料集だったと記憶しています。

当時、産業労働調査所(1927年3月に設立された、野坂参三が主任の産業労働調査所ではない)にいた所員で、東京帝大の仏文科を出たという人にその本を貸してもらい、翻訳もしてもらって勉強したのです。彼は当時、産別会議の事務局に出入りしていて私らと仲良しになり、書記連中が共産党と喧嘩を始めたということを知り、協力してくれたのです。彼は当時、阿佐ヶ谷(杉並区)に住んでいました。

日本共産党にも、いわば“異端者”がいたんですよ。余談ですが昭和49(1974)年9月、高野実の一周忌に津脇(喜代男)さんや西川彦義君などが集まりました。あなたは勘ぐっているようだけれども、産別民同の旗揚げにとくに高野さんから指導や協力を得たということはないのです。しかし、津脇さんや西川彦義君らは私らの決起に理解を示し、協力してくれたのです。

世界労連の結成の原点は、人民戦線期にあります。人民戦線期のフランス労働運動において確認された「政党からの独立」と「政党支持の自由」という原則が、世界労連の原点となって

います。これが基礎となり、第2次世界大戦のさ中に世界労連の結成へ向けた準備がパリで行われ、そして戦争が終結した昭和20年の9月に、ソ連なども参加して世界労連が結成されたのです。

ところが、日本共産党の指導部は世界労連結成のいきさつも知らずに、1920年代の赤色労働組合主義の理論をそのまま採用し、労働組合における政党のフラクシオン活動は自由である、といていたのです。

労働組合論や労働運動のあり方については、日本共産党より私の方が早く、かつ積極的に最新の理論を輸入し、真剣に勉強していました。だから幹部の長谷川浩にしる伊藤律にしる、理論的には産別民同の考えや運動に太刀打ちができなかったのです。その結果、共産党は私らに対して“分裂主義者の運動”とか“反共運動”とかのレッテルを貼って非難中傷するほかなかったのです。

産別民同の結成

三戸 産別民同は、昭和23(1948)年2月13日に結成されました。この日、日本橋の太陽生命ビルの地下1階の集会室に全通、電工、印刷出版、全生保、新聞単一、港湾など各単産出の幹事・執行委員の有志や私ら約60名が集まって発足の趣意書、声明書などを協議し、その結成を申し合わせました。会場は、産別会議の幹事で、全生保から出ていた金山敏さんが会社と交渉して借りてくれたのです。

産別民同の結成は実は、もう少し後に予定されていました。2月13日の会合はいわば準備会であって、民同の運動方針や正式結成のさいに発表する声明書などの文案を話し合うためのものであったのです。

ところが、非公開だった会合に『読売』の記者の渡辺文太郎さんが潜り込み、この集会や声

明書をスクープしたわけです。翌日のNHKは、定時のラジオ放送で繰り返し伝え、他の新聞においても報道され、産別民同は事実上、結成されたことになったのです。それで私も翌14日に急ぎょ趣意書を発表し公然化した、というのが真相なんです。

さて、産別民同の基本目標は産別会議を民主化すること、加盟するいずれの組合でも自主性を確立することにあります。この点は、例えば2月13日の声明書においても政党、資本家、政府から支配されない独立・自主の組合を確立するとか、共産党のフラクション活動を排除するとか、という文面で指摘されていたと思います。

さらに日本経済が当時、再建か破綻かの瀬戸際にあって、このことに労働組合がどう対処するかが問われていました。産別民同は、産業民主制を確立するためにも、日本経済の復興において労働組合として果たす責任があるだろうと認識し、生産の社会的責任を訴え、かつ労使双方が責任をもつ生産復興運動を展開すべきことを指摘していたと思います。この点について少し補足しておきたいのですが。

どうぞ。

三戸 日本経済の復興は当時、何よりも優先して取り組まなければならない課題でありました。これは資本家であれ労働者であれ、あるいは社会主義とか資本主義とか、イデオロギーや体制の問題とは関係なしに果たさなければならない課題だろう。

産別民同は、生産の復興を当面の最重要な課題と位置づけ、片山内閣が採用した労務加配米の増量で生産を促す復興運動や、「賃金あげろ」「食わせろ」と一方的に要求する復興運動だけでなく、これらをも包含しながら、労働者の社会的な責任のうえに立つ自主的な生産復興闘争をめざしたのです。

当時、生産増強をもって労使協調とみなす見方がありました。また、自らの職場や経営を優先させる主張もありました。産別民同は、生産復興運動を労働者階級の社会的、歴史的な任務として自覚し、これを果たしたいと考えていたのです。

そして、この点こそ重要なのですが、もし生産復興運動が一職場や一経営にかぎられるならば、労働者は職場に固定され、労働戦線の統一はできない。私らは、生産復興運動を労働者全体の社会的、歴史的な責任とする一方で、労働戦線統一運動の出発としても位置づけ、さらに労働組合における民主化と生産復興運動こそが、組合員の団結を固め自主的な組合へ再組織するきっかけにもなるに違いないと考えたのです。2月14日に発表した趣意書は、この点についてきちんと指摘していたと思います。

読み直してみます。

6 新産別への展開

“細谷理論”について

産別民同の指導は“細谷・三戸コンビ”でなされていたそうですね。

三戸 そんなことはない。誰が言っているの？

手元に資料がありませんので…。『労働週報』（産業労働調査所）か『社会通信』（野田経済・社会運動通信社）だったと思います。もしかしたら、浅川謙次氏の『日本労農通信』（日本労農通信社）の記事であったかもしれない。

ところで、産別民同の運動については“細谷理論”の実践であり、細谷さんと総同盟左派の領袖・高野実氏との提携で展開された運動である、と僕は理解しています。

では産別民同の基本的なねらいは何か？

僕自身は、これはのち総評の結成となって実現したわけですが、総同盟が掲げる旧来の底無しの労資協調主義でなく、あるいは日本共産党の“極左”的な路線でなく、日本における自主・自立の労働運動、あるいは産業民主制の理念を重視した社会民主主義の立場に立つ労働運動の展開をめざす運動であった、と思うのです。この点はどうか。

三戸 まず後者の問題ですが、大筋ではそうだったと思います。いまあなたは「細谷理論」といいました。細谷さんの理論は、「安定点理論」などと呼ばれ、遅れた組合を引き上げ、進んだ組合を引き下げてその安定点において組合活動と労働戦線の民主的統一を確保すべきである、という理論です。

これはさておき、産別会議は日本共産党の支配を受け、組合員の意向や意識的な立ち遅れを無視した“極左”的な活動を行っており、そのためには産別会議を民主化し、その障害となっている共産党のフラクション活動を排除しなければならない、というのが本筋論です。

細谷さんは、労働戦線の統一についても、総同盟の右に偏り過ぎた路線を修正する一方で、革命的戦闘的な路線に偏ってしまった共産党の路線を是正し、その中間に位置する民主的統一戦線を構築する必要がある、と主張しておりました。そしてそのためにも、産別民同は結成後に、総同盟左派の高野さんと連絡し提携しました。

けれども、戦後という新しい時代における労働運動のあり方としては、鈴木文治や松岡駒吉らの古い労資協調主義であっては、経営者から支持されても、労働者から全幅の支持を得られることは考えられない。やはり新しい労働運動は、新しい民主主義に立つ産業民主制を志向するものでなければならない。産別民同の運動は、

日本の労働運動において社会民主主義が主導して労働組合運動の再編をめざす運動であった、という点でそれなりに歴史的に評価されると思います。

高野実との関係

三戸 次に、高野実が産別民同の結成に加わったかどうかという問題ですが、前回も述べたように、そうした事実はない。これは断言できます。ただ、細谷さんと高野さんが産別民同の結成について何らかの“默契”、あるいは事前に話し合いを行ったと思われなくもない。だが細谷さん自身は、高野との“默契”などないといっていました。

高野実氏が主導して、総同盟が産別会議の組合員や中立系の組合に民主化運動の提唱を行ったのが1948年1月13日のことです。総同盟もこれ以降、自らの組織でも民主化運動を開始しました。産別民同の結成はちょうど1か月後の2月13日のことです。やはり両者が協議してすすめた、と理解するのが自然であると思います。

三戸 だが、同じ「民主化運動」であっても、産別民同のそれと総同盟のそれとでは、色合いも性格も違いがありましたからね。産別民同の意義の一つは、たとえば斎藤鉄郎の国鉄反共連盟や、産別会議系の組合で自然発生的に始まった反共を旗幟にした運動を、本来の民主化運動として歴史の軌道に乗せたことがあげられます。

総同盟でも、高野が主導して民主化運動が展開されました。しかし細谷と高野との間で意見交換なりはあったかもしれないが、二人が提携して産別民同の結成を協議したという事実はまったくない。また当時の情勢は、そうした気配さえ警戒されていたのです。産別民同の結成を実務面ですすめたのは、私や大谷徹太郎なんで

すが、私も大谷も当時、高野実らには会っていない。

産別民同の結成を報じた『社会通信』の第201号（1948年3月11日）に、こういう記事があります。この記事は、細谷氏と高野氏が戦前から同志としての交遊があり、高野氏が総同盟において民主化運動を始めるさい、むしろ細谷氏が高野氏に対してアドバイスを試みていたのであって、総同盟の民主化運動は、産別民同の運動と“連動”しているというニュアンスで記述されています。少々長いですが、紹介します。

「さきに総同盟でいわゆる一・六反共運動を展開するに当たって、同氏（細谷）は高野氏に対し『単なる反共運動では大衆を反動化する結果となるからあくまで組合の民主化運動をスローガンとしそれに反共を含めるべきである』と忠告したといわれ、その結果総同盟中央執行委員会は組合民主化運動を決議し、各組合によびかけて、フラク活動からの組合自主性の確立をスローガンとして具体的な活動を展開しはじめた程であることからして、今度の産別内の民主同盟（ママ）は、総同盟の民主化運動と一連の関係なきにしもあらずとされるのも全く的はずれた観測とは云い難いものがあるようだ」と述べております。

三戸 うん……。現象をそれなりに、うまく辻褄を合わせた感じですね。それに、同じ戦前派でも細谷と高野を戦後のものさしで見てもはずいよ。

僕も当初は、産別民同の結成について、高野実氏ら総同盟左派の働きかけがあっただろう、と思っていました。この新聞記事によれば、実はその逆で、細谷さんの総同盟左派に対する関与、ないしは当時の民主化運動におけるリーダーシップみたいなものが感じら

れるのです。しかし、それは産別民同の旗揚げや運動に対する反響の大きさから、そう受け取られたのかもしれない。実際、影響は大きかったですね。

三戸 ええ。繰り返しになりますが、産別民同の結成において私らが総同盟の左派や高野実と提携したということはないのです。細谷さんが、私らに隠して裏で高野や総同盟の左派の連中と連絡をとっていたのか、それはわからない。もしそうであれば細谷さん自身、のちに「高野とは実はこうだったんだよ」という話が出てもおかしくないと思うが、彼から生前にそんな内幕話はただの一度も聞いていない。いやむしろ、こちらから聞いても、強く否定していました。

もちろん産別民同の結成後は、私らは総同盟左派との提携をすすめました。しかし、この提携も昭和24年の暮れに総同盟との提携が打ち切られて、民同運動も終息し、両者の連繋も打ち切られました。

おっしゃる通り、細谷さんと高野との関係は深く、細谷さん自身、総同盟で出発しています。彼は総同盟の第2次分裂（1926年12月3日）で除名され、中間派の組合同盟をつくったけれども“革反”の運動を起し、のち全協へ移って検挙されています。そして、6年間ぐらい牢屋に入れられて、昭和11年に釈放されました。

高野実とは、これ以前にも接触があったらしいのです。けれども細谷さんが高野と接触以上の関係をもつのは、釈放後、全評（日本労働組合全国評議会）においてであったと理解しています。また産別民同の旗揚げに参加した喜田康二君も、この全評のときのメンバーだったらしい。

いま、あなたは『社会通信』の記事を紹介してくれました。細谷松太と高野実の関係をことさら問題にし、産別民同の運動が二人の“合作”であるようにとりあげるのは、こうした背景が

あったからでしょう。でも私らは、二人の関係はそんなに深く、また密接だとは思っていないのです。原点という元を遡れば、片や組合同盟系から共産派、これに対して高野さんは労農派の出身ですからね。両者には労働組合論でも、民同論でも違いがあるのです。

新産別運動への転換の背景

『民主化同盟』の第24号（1948年11月10日）を見ますと、産別民同は1948年11月10日、拡大実行委員会を開き、討議の結果、新産別の結成を決議しております。そして、これも『民主化同盟』の第27号（1948年12月20日）に紹介されていますが、翌12月10日から開催された産別民同における第2回大会で正式にこれを承認し、産別民同は、新産別への転換、すなわち新しい産業別連合体を結成する運動ないしは労働戦線の統一運動へ転換したわけです。

産別民同は、産別会議の民主化を目的として結成されました。産別民同の運動は、産別会議の組織と運動を内部から民主化する、ということに基本的なねらいがあったと思います。ところが産別民同は結成から半年もしないうち、新産別の運動へ転換をはかりました。

三戸 「半年もしないうち」というと？

産別民同は、第2回大会に先立つ1948年7月31日、国鉄上野駅の会議室で第1回全国実行委員会を開催しています。すでにこのとき、新しい産業別組織の結成や産別会議に対抗する“民主的”な労働組合の全国組織の結成を決めております。産別民同の結成は1948年2月13日結成ですから、計算しますと5か月ちょっとの経過です。

本日、お尋ねしたいことの一つは、当初は新しい産業別組合結成に否定的であった産別

民同が、なぜ新産別運動の方向へ転換したのかその理由についてであります。どういう事情があったのですか。

三戸 まず、産別民同の運動が産別会議の民主化を目的としていて、いわば組織内部における運動の形で始まったことは事実です。また産別民同は当初、おっしゃる通り新組織結成に否定的でありました。私自身、そういう考えでした。

けれども、条件・状況が質的に変わったのです。産別民同が成立すると、日本共産党と産別会議は私らを徹底的に排撃する態度に出ました。産別会議では、事務局長の吉田資治さんが“民同運動を認めない”という断を下し、執拗かつ徹底的に私らの動きを妨害し、私らは一時、表立った形で動くに動くことができないような状況となりました。この点が一つあげられます。

もう一つは、産別会議それ自体に、理由が存在しています。産別会議は、昭和23年11月19日、駿河台の明治大学で第3回大会を開きました。労働運動史の年表などを見ますと、この第3回大会を前年7月における臨時大会と合わせ、通算で第4回大会と記録している場合もあります。

この第3回大会で、産別会議は“民同は反労働者的である”として、解散決議を採択しました。この決議に電産、全日通、全生保が猛烈に反対し、50人を超す代議員が退場しました。ここに産別会議の分裂は確定したのです。産別民同系の組合は排撃され、事実上、排除されたのです。

それだけじゃない。産別民同が、新産別の運動を起こすにあたって決定的な条件になっていたのは、産別会議が、第3回大会で民同の解散を決議し、左翼労働組合主義を清算するどころかその傾向を一段と強め、日本共産党の方針に

したがって全労連の乗っ取り、ないしは全労連の“産別会議化”の動きを鮮明にしたからです。

どうということですか。

三戸 日本共産党は1947年以降、大産別整理の方針を打ち出します。この方針は、48年に入り私らの産別民同が結成されるや、拍車がかかり、産別会議系の機器、電工、車輛、鉄労の4単産に、中立系の造船、自動車、電線、金属鉱山を加えて8単産の合同、いわゆる大金属結成の構想が打ち出されました。化学産業においても、産別会議の全日化を軸に、中立系の組合を結集する大産別の構想が提唱されました。

これらの構想の中で、日本共産党が大産別の統一を前提とする無条件合同のためなら、産別会議の枠を外し、自らを解散してもよいという方針を打ち出しました。この大産別統一の舞台となったのが、全労連でした。全労連には、産別会議だけでなく、総同盟も、また中立系の組合も加盟していました。日本共産党は、産別会議だけでなく、全労連に“投網”をかけて丸ごとの支配をめざしたのです。要するに、“全労連の産別会議化”という新たな左翼労働組合主義の動きが顕著になったのです。

総同盟が全労連から脱退したのは、年表を見ますと1948年6月28日のことです。総同盟の脱退は、こうした動きの中で起きたのです。総同盟は、全労連における労働組合の連絡協議機関としての機能を失ったとして、脱退したのです。

総同盟の全労連からの脱退や、産別会議における電産、全日通、全生保の民同派代議員の脱退、さらに電工の主軸となっていた神奈川支部における民同勢力の台頭などを背景に、民同系組合の結集体をめざす動きが、1948年の後半以降、顕著になりました。

民同の旗揚げから間もなく、産別民同、国鉄

民同、総同盟、日放労などで民同系の提携機関として労働組合民主化協議会が結成され、その上で6月12日、名古屋市で産別民同の第1回全国大会を開いています。

もう、民同系労組における新産別結成への動きは内部では止められない動向となっていました。昭和23年11月10日、東交本部で開かれた拡大実行委員会では、先ほどあなたが指摘しましたように、新産別結成促進を決議しました。その前の名古屋における第1回全国大会のときも、小松製作所の組合代表が「産別会議からなぜ早く脱退しないのか」とせっつくのです。脱退して新組織を結成しないと、私らは行き場が無くなってしまおう、と彼らはいうのです。とにかく脱退しろ、脱退しろの声でした。

産別会議を脱退したら、民主化運動にはならないわけです。私自身、必死に脱退したらいけないと止めていたのですが、もう止められる状況ではなかった。産別会議脱退、新産別連合体の結成の要望が全体の声となりました。

しかも、日本共産党が民同運動に対抗して、全労連の乗っ取りすなわち全労連の産別会議化をすすめていましたので、民主化運動の基礎に立つ新産別の結成は、とにかく急がなければならなかった。新産別の結成をめざす動きが次第に強まっていたのです。

総同盟左派の動向

三戸 前回、産別民同はその結成において、事前に、高野実や総同盟左派との提携は関係が無かったことを述べました。しかし、産別民同が結成されて以降、こんどは一転して密接な関係となり、全労会議準備会の結成でも両者は軸になっていました。

日本共産党の“全労連丸飲み”にどう対抗するのか、個々バラバラでは太刀打ちできないわけです。民主化運動の発展の基礎に立って、産

別民同に、新しい産業別統一組織の結成の任務が課されるようになりましたが、もう一つ大きなうねりとなるためには総同盟の参加が不可欠でした。ある意味では総同盟のあり方が、新産別運動の成功、ないしは左翼労働組合主義を克服する新しい労働組合の全国統一組織が結成できるかのカギとなっていました。その総同盟で、昭和23年10月、劇的なことが起こったのです。

高野実氏が総同盟の総主事に選出されたのですね。

三戸 そうです。総同盟の重鎮で、芦田内閣の副総理だった西尾末広が昭和23年6月に昭和電工事件で逮捕されています。こうしたこともあって、総同盟の左派が、猛烈にボス支配に対する民主化運動、伝統的な右派支配に対する民主化の運動を起こしたのでした。

その結果、10月21・22日における第3回大会で高野実が総主事に選ばれ、役員選挙でも左派が大きく進出しました。総同盟の歴史で初めて、左派が指導権を握ったのです。大会は、西尾末広の除名や、総同盟自らの民主化を決議しました。

総同盟の左派は、1949年に入ってさらに勢いを増し、組織全体の7、8割を抑えてしまいます。左派が7、8割を抑えてしまうとはすごい。だからこんどは左派が勢いづき、右派の存在を考慮することなく、新産別の結成や新しい産業別組合の全国組織の結成に対してもリーダーシップを握ろうとしたわけです。

どういう形で？

三戸 総同盟左派と産別民同の提携という形ですよ。この時期、昭和24年9月、国際自由労連加盟促進協議会がもたれ、国際自由労連結成大会から帰国した連中が私らと違う行動をとるのです。彼らは流れとして、無所属組合や中立系が多く、どちらかといえば全労連系です。しかし、戦線統一の基本はやはり産別民同と総同

盟の提携でした。これは高野実の意見です。実際に、昭和24年2月に結成された全国労働組合会議準備会、いわゆる全労会議準備会は産別民同と総同盟左派と国鉄民同が軸となっていました。

けれども、労働戦線の統一は紆余曲折しました。総同盟において高野実ら左派が一挙に指導権をとってしまった結果、右派が左派に対抗し、どうにもならない状態になってしまったのです。総同盟の右派は“高野憎し”もあったのだろう、自由労連日本協議会に力を入れて一步も引かないのです。右派は中立系にも手を伸ばしていました。

こうした中で、高野さんら左派は、産別民同との統一が実現しなければ、総同盟は内部対立が激しいから收拾がつかなくなるという懸念もあり、新しい労働戦線の統一は中立系も無所属も含めてやろうじゃないか、とこんどは方針を180度切り換えてしまうのです。昭和24年の1月か2月のことです。この動きが、やがて総評結成として加速し、リーダーシップは総評結成推進派(左派)に移るのです。

新産別の結成

三戸 新しい労働戦線の統一は、総同盟右派の場合、国際自由労連日本協議会の線で推し進め、左派の新産別との合同に反対するのです。とにかく、総同盟解体につながるような動きには反対でした。

産別民同にとって不幸だったのは、昭和24年1、2月の時点で主体性を確立していなかったことにあると思います。産別民同は当時、なお片足を産別会議に残していました。主体性を確立していない中で、機動的に動くことができなかったのです。

産別民同は24年の夏、7月14日に大阪で結成準備大会を開き、とても賑やかな気分でした。

産別会議の“花形”であった電産が民同派となり、結成準備大会の直前、電工の主力であった東芝に民主化協議会が結成され、民同運動は広がりを見るわけです。

けれども高野実や総同盟左派が突然、総評結成に切り換えた24年1、2月の時点で、流れは決まったようなものでした。産別民同の組織を一体どうするのか。私らは情勢の推移をなお観察する必要もあり、新産別の正式結成まで存続させることを決めました。

新産別結成の経緯について、『新産別の二十年』(1969, 1970年)に詳しく記録してあります。労働省の『資料労働運動史』(1948, 49年版)にも紹介されていますので、もうお読みになったことでしょうか。

昭和24年12月10日、新産別が、全国産業別労働組合連合という名称で結成されました。結成大会は非常にみずばらしいものでした。組織人員32万人となっていたけれども、実際に会費を払ってくれる組合員は1万6000人と少なかった。

大会は、総同盟左派の主導で総評への結集という方針が出たこともあって、新しい産業別労働組合の大合同どころか、鞍替えするような形で“総評へ”という声が内部からも出されたのです。結局、新産別の結成大会は産別民同の解体大会ともなってしまったのです。これまで産別民同を通じて産業別統一組織を結成しようという声は、サーッと潮が引くような形で立ち消え、新産別という小ぢんまりした形にまとまってしまった……。

志半ばで、産別民同の運動は終息したわけですね。

三戸 まあ、そういうことでしょうか。産別民同は当初、産別会議に対抗する“民同派”であって組合組織ではなかった。産業別組織として固まろうとすれば、既存の労働組合との関係も

問題になります。

民主化運動を機とする日本労働運動の激動期に、主導権を総同盟左派が握ってしまったことも、あるいは問題だったのかもしれない。彼らは、日本共産党に対してある意味では受け身に立っていた結果、とにかくこれに対抗するものであればどういう形であれ、何であってもよいということで、総同盟左派が遮二無二、総評結成を押し進めて行ったわけです。

私らは将来を展望しました。けれども当面は、独自の全国組織結成に踏み切らざるを得なかったのです。そして、産別会議の全日本機器労組から脱退した支部を結集してまず全国機械工業労組を結成し、さらに車輛、電工、化学、生保などが集まり、小世帯であれ、新産別という形でひとまず新しい状況に対応したわけです。私らが構想した大産別結集は結果として実現できなかった。残念ながら、この点は認めざるを得ない。

産別民同の精神

三戸さんは今から20年前、「民同論 組合運動の戦後の原点」(『労働組合の思想と行動』1976年)をお書きになっています。そこで三戸さんは、産別民同の意義について日本共産党 産別会議の主導のもとに始まった日本の、いわゆる左翼労働組合運動に転換を促し、「労働運動再編統一の転機を作り出した。これが総評結成へ発展したことは周知のとおりである」と述べております。この文脈は、産別民同が、総評結成を準備しそれへの橋渡しを行った、と評価されているわけですから、ポイントはどちらにあるのですか。

三戸 ……。戦後日本の労働戦線統一の問題・歴史という領域から見れば、産別民同は戦線統一を総評結成に求めたのではないけれど

も、総同盟左派の動き、とくに高野実の思惑とも相俟って、労働戦線再編・統一の転機を促し、担ったことは疑いないだろう。

しかし、私がここで産別民同の運動や歴史で強調したいことは、その精神なんです。産別民同が志した精神、理念なんです。産別民同の運動は、ウェブの産業民主制の理念に立って、労働組合に独立性と民主性を求めたことにあります。

“民同精神”といわれるもの、あるいは民同の目的は、簡単に言ってしまうと労働組合の自己確立運動にありました。日本共産党や産別会議の指導部とのたたかいは、そのための手段に過ぎず、目的では決してなかったのです。この点は、ここで改めて強調しておきたいと思います。

労働組合における自己確立運動とは、労働組合が何物に対しても、政党であれ、権力であれ、あるいは経営・資本に対してはもとより、労働組合の自主・独立をめざすものでした。この

“民同精神”は、時代が経過しても大事なもので、いわば近代産業社会において普遍的な意味を持つ価値だろう、と私は考えています。

この度は何回にもわたっての証言、有難うございました。準備で、大変お疲れだったと思います。心より感謝申し上げます。なお、今回の三戸さんの証言は、『大原社会問題研究所雑誌』を通じて発表し、記録に止めたいと思います。

私ども法政大学大社研は再来年（1999年）2月、創立80周年を迎えます。三戸さんの証言は、大原社研が現在、創立80周年記念出版として企画しています『証言・産別会議の運動』（御茶の水書房、2000年3月刊）にも収録したく存じます。ご了解を頂きたいのですが。

三戸 承知しました。どうぞよろしくお願いたします。

（完）

【注記】三戸信人氏の証言は、全国労働組合会議準備会の結成経緯、日本社会党の再建といゆる“山川新党”との関係、総同盟の解体問題についても言及されたが、今回、これらの証言は紙幅の関係で割愛した。稿を改め、いずれ「新産別と総評の結成」というタイトルで発表することにした。（吉田健二）